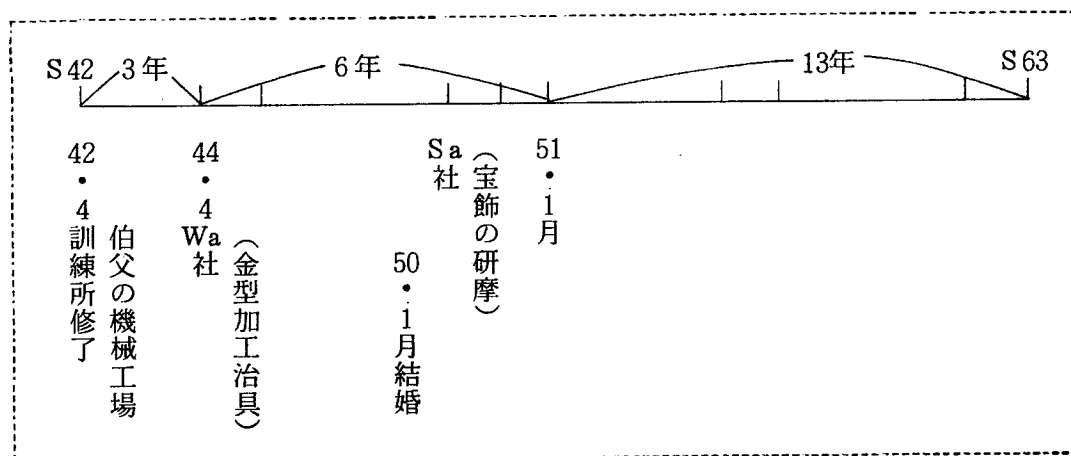


〔V〕 訓練終了後、機械系の職場に就職したがその他の分野に転職
しかし部分的に機械加工も

〔事例 11〕 Ko 氏 (Se 株)



Wa 地場産業である宝飾関係については向上訓練コースの設定は考えてこなかった。しかし、これからはこの業界へもワイヤー・カットなど機械についての向上訓練が必要と思うのです。

<工場見学>

To 宝飾の工程はどのようになっているのですか。

Ko うちの場合は約10工程、あります。まず、デザイン。そしてデザインに沿って原型を作る。その原型を大型のラインに入れるわけです。昔のように1日1本作ればよいというのではなく1つの原型で10個以上作らないと採算があわない。

(1個作りの場合はほとんど1人でできだし、組み立てまで自分で最後までやるわけです。)

うちの場合は分業でおこなっています。

(その分業は)外注と社内とでやります。例えばデザインは社内だけですと片寄りますので外注もします。簡単なものは原型を韓国で作らせている。労賃が安いので。甲府にもこの関係で2~300人の韓国の人がある。うちでは韓国の方は型を作っている。

要するに、うちあたりではマスプロでないとやっていけないわけです。市場性を考えて値段とデザインとかみあわせて量産、分業体制をとっているわけです。

一時は1ロットが10本、5本ということもあったが最近では1ロットの本数は多くなる傾向にある。

それは販売ルートが多様になっていることや1人で何本も持つようになっているからだと思えます。確かに量は出るようになりました。

このようなニーズにあわせて、われわれはいかに量産できて付加価値のあるものを作るかということにかかっています。

To 時代的にみて加工技術はどのように変わっていますか。

Ko 非常にバラエティにとんできている。デザインについては日本だけではなく、東南アジア特に香港の商品が入ってきている。労賃が安くて日本人の好みのデザインが入ってきている。(統計では200億とも300億とも言われている。)そのような商品を作るには非常に技術を要するものが多い。東南アジアでは石が豊富にあるものですからデザインをいかようにも変えられるわけです。カットの技術にしては子供の頃からこのカットに従事(技術を習得しているわけです。)それに加えて低賃金ですから、安くて見た目には真似できないような商品が(日本に)入ってきてつつあります。

ですから工場を香港やバンコクにもっていく動きもあります。しかし言葉や習慣の関係からかならずしもうまくいってはいません。

また香港あたりから業者が日本へ売りこみに来ていますのでわれわれとしてもオチオチしてられないわけです。(現在)われわれもデザインの開発が急務となっています。デザインのサイクルが短いこともあってなかなかむずかしい面です。

一般に対応できるような技術はついてきていると思います。

(このようなわけで)うちでは分業で生産をおこなっています。

To 1つのものを1人で作るという形態はないのですか。

Ko ほとんどありません。もちろん、そのような仕事のできる人間はおります。しかし、利益を考えるとそれをやっていたのでは間にあいません。

To Koさんが訓練所を卒業したのは何年ですか。

Ko 昭和41年度です。(42年3月)

To こちらの会社(Sa社)に入れたのは何年ですか。

Ko 昭和51年です。会社創立と同時に入りました。もう、13年になります。

To この会社で初めて指輪の研摩をはじめたのですか。

Ko そうではないのです。その前に、半年ぐらい、他の会社でやっていました。

Ko 卒業して3年ほど伯父の工場にいました。冷凍機関係の機械加工をやっていました。旋盤もやりましたし、溶接も～。

小さい工場だと何でもやらなければならないわけです。

冷凍機の修理、製造を～。

伯父の所にいてわがママが強いということで他人の釜の飯を喰わないといけないということで、Ya先生(機械化の指導員)の紹介でWa社に入りました。

To Wa社ではどのような仕事を～。

Ko プレス金型をやっており、治工具関係を担当しました。機械類はほとんど使いました。(その中で)訓練校にはなかったのは放電加工機ぐらいです。

Wa (訓練校には放電加工機は)今もありませんね。

Ko そこで6年ぐらいたったのです。ところが自動車関係が不景気になって、宝飾の部門に移りました。

そして、その宝飾部門が独立して新しい会社となり、社長と一緒に独立したことになります。

To 今の会社、Sa社での仕事は今までの機械加工とはどのように結びつくのですか。

Ko 機械関係と今の仕事とは全々違います。ただ、訓練校で2年間機械科で学んだわけですが、現在は貴金属を研磨しているわけですが(訓練校で学んだことが)マイナスになっている
と言うことはない。いろいろな面で身につけたものは応用されている。

C 私の見るかぎりでは訓練校の機械科を出た人は研磨に非常にむいていますね。むしろ他の部門よりむいている気がします。

To どのような面ですか。

C 顕著な理由はないのですが、機械を扱っていたということだけでも違いますね。

Ko 研磨はグライダーと同じ要領なのです。グライダーを使っていたからそれが上手に使えるということであらう。(今までに使っていた機械の)応用というか、延長のような形になると思います。

手かげんというか、プラチナと金とではそのおさえ加減が違うわけですが、その圧の加減というか、その辺のことが身につけているから。

C 私は事務屋ですが創立の頃、研磨をやったのですが、やたらと磨けばいいという感じなのですがそれではダメなのですね。いろいろな機械を使っていたというだけで(そこに)違いが
でるのです。

Ko 研磨という仕事は非常に手首を使います。そのような意味であっているのではないでしょう

か。
昔、仕上の仕事、ヤスリかけを半年ほどやったことがあります。それよりも研磨の方があうと思います。

機械関係でのヤスリの使い方と指輪関係のヤスリの使い方では全然違うのです。

To 訓練校で勉強したことは違った世界に入ってもある意味ではプラスになっていると言われ
るわけですね。

Ko (訓練校や前職の機械加工で)身につけた技能が(今やっている)指輪の仕事に生きている。例えば、治具を作るとか、そのような面でプラスになっている。

工程をみれば手で持っているのではなく、何か治具を作ればよいということがわかる。

To どのような治具を作れば、仕事がやりやすくなるか、工程ごとの作業を見ればその判断が
つく。(また、治具の加工もできる技能をもっている。)

Ko やはり、元は訓練校で学んできたものがプラスになっている。

To なるほど

C (この仕事は)機械加工はできませんから。これから何年たっても手作業ですから。

To そうすると研摩という仕事は（外からみると前の仕事に続いていないように見えますが）
続いていると解釈してもよいのですね。

（話はわかるが）最近、技能開発センターでは在職者を対象とする向上訓練を行っています。
比較的、職務経験の長い人々に教育をする必要があるのか、また、どのような内容の教育が
必要なのかを探っています。

仕事をかわったときに、このような教育の機会があったらよかったとか、このような勉強を
過去にしたことがある、といったお話を聞かせてください。

Ko ぼくらは訓練期間が2年間であった。短か過ぎた。3年間あってもよいと思う。

社会へ出てから、そういった勉強をするというのは問題点がある。要するにぼくらがやって
いるのは一生、研摩しかやらないのです。例えば、いろいろの部門の仕事をやるのでしたら、そ
のような教育も必要でしょうけれどもうちの会社の場合には決められた部門でやっていますか
ら～。

ぼくは（教育は）必要ないと思いますけれども～。

ただ、ぼくが一人でこれ（指輪）を作るのであればぼくは勉強したと思います。

今、研摩をやっている若者は指輪加工の工程をはじめから終わりまでこうなるということを知
らない人が多いのです。

宝飾関係の仕事をしているとなれば、1から10まで全部知っていなければいけないとぼくは
思うのです。

（分業化が進むと教育の必要性は減少してくる。トータルな熟練、総合的な技能、多面的な
技能を形成するには教育が必要になるということであろうか。）

Wa 未経験でこの職場に入った人で、研摩をしている人達に対して使ってみて3年、5年とた
ってから教育させたいことはありますか。

Ko あります。そうした若者に夜間、1、2年間でも指導してもらえばタシになると思う。
（しかし、具体的な内容は提案されない。）

Wa この業界であると、そうした人達にどのようなことを教えたらいですか。

Ko うちのように分業形態をとっている会社では指輪が全生産の9割であり、月間の製造本数
は約5000本である。

私が思いますに、特に若い人の場合、慣れが必要だと思うのです。ひとつのことを覚えるの
に1年かかる人、3年かかる人と様々ですが～。ペースの問題はあるが根気よく、まじめにや
っていさえすればある程度～。

うちでは今、4000種類を扱っている。ひとつひとつ磨き方も違っている。ケース・バイ・
ケースでいろいろな技術を出さないといけない。しかし、慣れが一番必要ではないかと思っ
ている。～指輪にダイヤをつけることでも1年目では10個でも2年、3年目には2倍、3倍となっ
ていくのです。これも1つの慣れでしょう。

C 技術～というより慣れです。

Ko 教える人がその人をのみこんで仕事の上に出せればよいのですけれど～。

ある程度時間がたつと誰れでもやれるようになる。

ですから基本段階ではもちろん教えますが繰り返し、繰り返し一緒に同じ仕事をしながら教えることによって、波が生じて同じようにできるようになる。

To 基礎教育は別として、経験者については一緒に同じ仕事をしながら教える、いわゆるOJTで技能を習得していくということですね。（分業形態での単一の技術を深めていくには特にこのことが言えるかもしれない。）

Ko 慣れるということ、作業を反復、繰り返すことによって熟練する。

To 反復練習による熟練の形成ということが職業訓練の主流であった。ところが、機械加工でもNC化され、旧来の熟練とは違った技術形成が必要となっている。それにつれてOJTのみでなく、offJTの形態での教育訓練が必要であると言われている。

手加工で身体で覚えていくことが中心の仕事ですとOJTで技術を覚えていくのが最も適切なのでしょね。

Ko 私はそう思います。

To 先程、決められた部門をやるには教育は必要がない。しかし、1人で指輪を作るのなら勉強がある、と言われた。その点についてもう少し詳しく～。

C 1人でやるということは全工程を1人でやる。デザインから完成品までの全工程を1人で～。その工程のひとつ、ひとつを覚えていないといけない、ということでは～。

To 今、自分の担当している部門以外の工程を勉強するという事に～。例えば、デザインの勉強が必要、というように～。

Ko 指輪を作るのには12、3工程あるのでしょうか。その中の、1部門、研磨をぼくはやっている。ずっとこういう型でやっている。

技能開発センターでは向上訓練をやるのであれば、一個の製品ができるまでのことを教えてもらえればずっと楽になる。（いろいろの分野の～）

（分業形態の中で単一工程しか担当していない。その単一技術の習得は繰り返しによる、慣れによるもので長期にわたる。しかし、公共向上訓練に何をのぞむかといえば、トータルな工程すべてにわたる技能・技術を教えてほしい。これは何を意味しているのか。）

（自分の現在の担当部門の全工程の位置づけがわかる。）

C ひとりでやるとなれば営業まで入ってくる。“売れるかどうか”まで考えないといけない。さらに、原価を割り出していくらで売ったら生活できるか計算していかないとひとりでやっていけないわけです。

要するに、指輪を作る技術だけではなく、営業やデザインのノウハウなど、いろいろと勉強しないとけない。

（独立自営するとなれば、一通りの全工程を知る必要がある。それは熟練でなくてもよい。さらに、作る技術だけでなく、デザインや営業についてのノウハウも身につける必要がある。

その人のキャリア形成の目標が単一の部門でよしとすればそれなりの教育が（全工程の鳥瞰

し担当部門の位置づけを知る)必要であり、独立自営するとなれば、浅くても全工程の教育が必要となる。要は、その人が“今後どうなりたいのか”にかかってくる。))

T o 全工程を知ることの意味は何なのでしょう。分業形態ではひとつの部門での仕事ができればよい。トータルな技能は必要ないということですね。

いわゆる熟練は必要ないということでしょうか。

K o 熟練はやはり必要です。製品のよしあしは最後の研磨によって決まるのです。

異形のもので、例えばこの縁ですね。これを等間隔にピシッとだすのが研磨の技術です。ですから、ただ慣れてやればよいというものでもない。

C このようなツメのようなものも磨くわけですか磨き過ぎて片方が細くなったりしてはダメなわけです。最後になって全部が等間隔にならないといけないのです。そのような技術がやはりあります。

(分業の中でも熟練はある。それはO J Tで習得するより方法はない。全工程をトータルに浅くなら、off J Tで～。)

T o 一人で指輪を作るとなれば勉強する必要があると言われたのにはいろいろの意味がある。

- 1) 加工技術からデザイン、営業まで
- 2) 加工技術の全工程を
- 3) 研磨の中でも10工程もある。その部門の全工程を

C ひとつの石をとめるにもいろいろのとめ方がある。1人でするとなればそれを全部おぼえなければならぬ。

K o ぼくらが今やっている研磨は形状がどんなに変わっていてもほとんど同じわけです。手先でやる仕事ですから同じわけです。工程は何工程か、ありますがやることは同じです。

T o 勉強するという視点からみると、分業化された仕事については企業の外で勉強することの必要はみつかりませんか。

C こういう業界だとむずかしいですね。ひとりで1つの製品を1人で全部やるのは非常に能率が悪い。分業にしないと1本あたりの単価が高くなる。分業して1人が研磨、1人が仕上げとした方が生産性があがるわけです。このように工程を分けて利益があがるようにやっていくわけです。分業の方が会社にとっては有利になります。

K o 指輪を1個作りする人が(外での学習形態で)学んだ方がよいのではないか。

O 昔のように鑄造から何からなにまでというのは今はむずかしいと思う。

K o 分業することによってその工程だけはオールマイティになれる。それで生産性はあがる。それは非常に大事なことなので会社の方からみるとその方がいいと～。

Wa 一つの工程が単純に見えるが、研磨をとっても膨大なノウハウが入っている。～だから分業をしてよりスペシャリストにしていく方が～

C 効率がいい。

T o その意味での教育はO J Tでできる。

機械加工などにかかわる教育訓練を考える場合と宝飾業界での教育を考えるのではどこか違

いがあるようですね。

ある意味ではその前にやっていた機械加工の仕事が今の仕事に続いている。

C 作業そのものは違う。作業は違うけれども仕事をしている中で、すでに身につけたものがプラスになっている。

ですから若い人に言うのですが、指輪1本研磨するのも自分で作業しながら、こうすればよいと思った治具を作ってみると～。短時間できれいに作れる。宝飾はきれいに速くできることを考えれば～と。

To 訓練校、その後の機械工場での技術が治具を工夫する場合の下地になっているといえるわけ～。

(よりよい製品を作ろうとすれば、治具の加工など処理することはでてくる。～作ろうと思うかどうか、が問題である。)

Ko 訓練校では厳しさというのがあるあって忍耐力が育成される。それが社会へでも役立つ。

訓練校卒業者は能力より技術力がついていますから、会社に入ってもすぐ使える。Ya 技能開発センターは設備もかなりのものですし、社会に出てすぐ通用したと、そういった面ですごくプラスになりました。

C Ya 技能開発センターの宝飾関係の科を設けようということですか。

To そうではなく、それぞれの業界の必要としている教育必要点を把握して、向上訓練コースを組織しようということです。

(offJTとして必要な教育要件がみえてくれば向上訓練として設定できる。)

Wa デザインという要素が重要であることから技能開発センターではデザイン科を設けた。

CAD、製図、デザインなど外部講師を呼んで計画を進めている。

宝飾業界とタイアップできるかどうかにも検討している。卒業生もできるもので～。

To 研磨という限られた部門だけを13年間やってきて単純だからあきてしまうということはあるか。

Ko そういったことはない。

Wa 研磨は奥が深いということかな。外から見ていると毎日研磨ばかりやっているとあきてしまう気がする。

Ko 研磨をやっているぼく達は仕上がった製品をみれる。

To 最後に仕上がった製品が見られるという点はこの仕事をやっているのよさでしょうね。完成感が得られるというか～。

ほかに治具の工夫をするという点もありますね。この仕事をしていてよかった点はほかにありますか。

Ko 治具を工夫するといったことは訓練校で学んだことが生きるわけで～。

(治具を工夫する活をするKo氏の目は生き生きしており、ここに自己の存在意義をおいてい

るように思われる。)

(前職の経験を現在の仕事に生かせるか人とそうでない人とがありうる。)

経験を生かせるかどうかは本人の心がけ次第とも言えるがそればかりでなく、他者からの経験を生かすガイド(援助)があってもよい。(向上訓練の新しい機能)

To 訓練校で学んだことがいろいろの面でよい影響をもっている。

Ko そうですね。自分で身につけたものはいつになっても役立つ。～やはり、技術力はこの業界に入ってもマイナスになっていることはない。

To 一般的にみると業界が違くと訓練校で学んだことの意味がなくなるごとく言われている。しかし、Koさんのように機械加工から宝飾へと移っても治具の工夫とか、工程を管理する面とかに機械加工の経験が生きている。また、研磨の時の押えの手かげんという技能面も機械加工をやっていることがプラスに転移をしている。

Ko 旋盤で切削する場合、3mmかけるのと5mmかけるのは違っている。～鉄の細部を仕上げるには、ちょっとこゆっくりもっていかとか、加減の感覚が身についている。それが今の研磨をするのにプラスになっている。

To なるほど。

Ko ただですね。訓練校を卒業しているのに指輪の仕事にまわる時には確かに抵抗がありましたよ。

ぼくはこのまま、どうしても機械関係をしたという気持であった。

当時、その気持があっても不景気だっただけに～。女房、子供を喰わせていかなければ～、生活がかかっていますから～。

当時、2～3年は機械関係の仕事をしたと思った。

でも今はこれで一生～。

同期生で機械関係の仕事をしている人は少いですね。ただ、To君でも父親と和紙製造をやっていて(機械科をでたことが役立っていないようだけれども)結局、機械を扱うわけでしょう。

To 宝飾の仕事に入る時に抵抗があったと言われましたが、気持の再整理というか、そのようなことがあったのでしょうか。

Ko “切り変える”という気持は半年ぐらいあった。指輪をやっていて～。その間に結婚があって、それで切り変えができた。生活が、成立っていかないということ～。

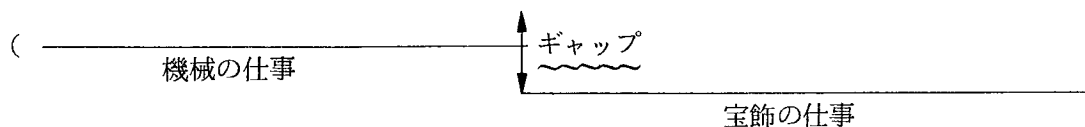
To この切り変えの時には、機械を続けていくか、指輪の方をやるか、かなりの葛藤があったわけですね。

Ko Wa社にいるとき指輪部門に移ったときも自分でいろいろ工夫で治具を作った。

また、伯父の所にもどろうかとも随分考えましたけど～。

今となれば、ここで一生がんばっていくしかないですからね。

T0 違った仕事に移って自分の“やりがい”の再体制化がなされている。(気持の切りかえ)
そして、13年間研摩の仕事をしてきて現時点で過去をふりかえってみると、何か自分のやってきたことはつながっている、その何物かが見えてくる。

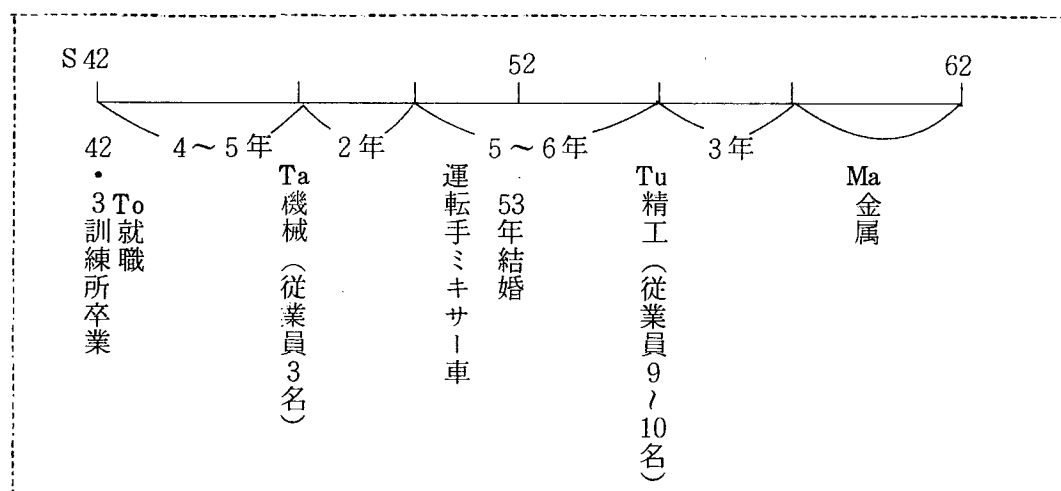


- 二つの仕事を通じて1貫したアイデアがある(自分観がある)
 - この人はギャップをつなげようと努めている。
- *このような意味のところに、何らかの援助、教育機会の研修、向上訓練が介在できないだろうか)

一般的にみると機械加工と宝飾での研摩はつながりがないようである。しかし、移ったときに気持の切り変えで苦しまれたけれども、宝飾研摩での13年とその前の機械加工をつないでみると1本なわけですね。

このようにみると若い時に職業訓練をうけて自分のより所というか、これは自分にはできるというものを持つことは重要ですね。そこに職業訓練の意義を新らためてみるような気がする。だから、若い年代を対象とする職業訓練は消してはいけないので、単に技能を付与するというだけでなく、職業的アンデンティティを形成という意味で、キャリア形成の“キャリア・アンカー”を持つ意味で若い世代での職業訓練は大切であると思いますね。

〔事例 12〕 Na 氏 (Ma 金属)



(この企業は金型及び治工具製作を主としている。自動化のためのメカ部の部品加工。

汎用フライス盤を主に使い、治具関係をNa氏はやっている。NC関係(マシニング、ジグボーラ)はあるがNa氏は使っていない。)

To NC関係はやっておられるのですか。

Na NCジグボーラはやったことがあります。～最初の1週間がものすごくキツイです。頭の中に入れてしまわないといけないので～。それはちょうど30歳のときです。

マシニングをならったときは完全には覚えられなかったですね。ですから今でもマシニングに手を出すのはいやですね。

To 訓練校を卒業したのが42年で～。

Na To社山梨工場。4年ぐらい。その後、小さい町工場へ、Ta社へ。その後blankがあって全々機械を扱っていません。約5年ぐらい。ミキサー車の運転を～。

それからFu精工、金型製作でそこから現在の会社へ。

To To社での仕事は～。

Na 生産技術課の工具管理。工具の研磨です。ドリル、カッター、リーマなど～。

To 4、5年やられて、なぜやめられたのですか

Na 今までやってきたことと全く違った職場へ配置かえとなって職長とやりあってやめることとなった。

研磨での職場の主任に研磨の仕方を教わってポチポチできるようになったのに、配置がえになったので～。

To せっかくできるようになったのにどうしてほかの職場に移らなければいけないのかと思った、

ということで～。

Ta 機械では～。

Na 旋盤、フライス盤で、主に鋳物～。

To それで運転に移られたのは～。

Na 友達がそのような会社をやっていて“ぜひ手伝ってくれ”と言うのです。それでズルズルと5、6年たってしまった。新車を5台買ったからそのうちの1台に乗ってこれろというので～。

Wa かなり給料もよかったし～。

To 結婚されたのは～

Na 53年。

To 機械加工をやっていて運転手に移るとき、機械をやらなくなることへの思い、この辺何かありましたか。

Na なかったです。あまり～。

To 再び、機械加工をやるつもりとしてTuさんに入られたのは～。

Na それはやはり、運転手は全然補償がないし、ボーナスも出ない状態だし、それでは困るので～。

友達が“やってみろ”ということで～。

同じ訓練所の同級生が～。

To Tu社ではどのような仕事を～。

Na フライス専門です。角どりだけです。

To Maへ移るきっかけは～。

Na (Tu)専務の知りあいで、元寿司屋さんであり、機械を全然知らない人が入ってきた。その人をバーンと持ちあげたのです。図面を渡して作れというように!! それでおれにやらせてくれと言ったのですが、ずっと角どりばかりやらせられる。それだからここにも仕方がないというのでWa先生の所へとんでいったのです。

機械の専門でない人で、ぼくよりずっと年下の人を～。

おれも図面1枚もらってやりたかったのだけれども～。全々それをやらせてくれないで角取り専門であった。

Wa先生のところへ相談に行って現在のMa金属に紹介してもらった。

(訓練校をでて技能、自分の腕にはある程度の誇りをもっている。それにもかかわらず単純な作業をやらされた。そこへ、機械加工の経験のない、年の若い者が入ってきて、図面をもらって加工する仕事をするようになった。自分の存在を無視されたような心境になったということであろう。)

To フライスの経験は長いわけですね。こちらでは1枚の図面をもらって仕事をしているのですね。

Na はい、そうです。

To 図面1枚もらっての仕事のよさは～。

Na 図面1枚もらってできたときの、すばらしさですね。作業台の上ののっけて～。

To 完成感というか、形のないものからあるものを作りあげたという喜びでしょうか。

Na はい。

To 今は、長い間いろいろの思いはしたようですが、自分の思いにあった仕事ができるようになったわけですね。

Na できるようになりました。

To 昔でいえば渡りあるいて仕事をおぼえるというわけですが、いろいろのところでいろいろの意味の勉強をしてきた。勉強したということで印象に残っているのは～。

Na 一番勉強したのは角取りです。今、ここへきてはじめてやっててよかったと思います。

(角取りだったら)誰にも負けない。

To Tu社にいる時は同じことばかりやらされて～という思いがあったが、ひとつことを専門にやったことが次の仕事をやるのに思いのほか生きていと～。

Na はい。

To To時代には何か教育を受けましたか。技能検定は～。

Na 技能オリンピックに出たことがある。

Wa 技能オリンピックがはじまった頃ですね。

Na 自分の使っていた機械だったから、どうにかこうにか。成績はダメでした。

To 技能検定は～。

Na 受けませんでした。(研摩をやっていたので～)

To これから技能検定をうけるという気持はありますか。

Na もうないですね。

To その他の会社にいるときに社外の講習会に行ったことはありますか。

Na ないですね。

To 社外と(研修の)機会は少ないのですね。

Na さんのキャリアをお聞きすると比較的長い運転手の生活はあるものの、そのほかは一貫して機械の仕事を続けている。

To 技能開発センターではNaさんのような在職者を対象として向上訓練を行っています。つまり、勉強の機会を作っているのですね。

このような研修、勉強の機会が作れないかという要望はありませんか。

勉強と言っても広くとらえて、職場で困っていることとか～。

Na (沈黙)別に、今はないですね。～強いて言えば、エンドミルを使った時の回転とか、どのくらい重切削ができるか、機械によって違ってくるので～。

Wa 材質によって切削条件とか、回転数とかを選ぶとき、カンでやるわけ～。

Na まあ、だいたい。メーカーから言ってきた表を見たり～。

To 新しい材質のものを削るときに、どのような条件でやったらよいが、試しにやってみて最適条件をみつけるのは技能開発センターの向上訓練でやってもよいかもしれない。

Wa 新しい材料を削るとき、知識があって削るのと、ないで削るのとでは知識があって削る方がいいような気がするが、どうだろうか。

Na そうですね。そのような講習だったら行きたいね。新しい材料についての回転数とか～、切粉のはけ具合とか～。

To 生産現場では試めしにやってみるということができないから、それを off J T でやるということはありうる。オシャカを作る機会というような意味で～。

(生産現場において同じような材料を削っているぶんにはより能率よく削るにはどのような条件にしたらよいか、などについての勉強が必要とされる場合もある。しかし、これらはこれまでの経験の中で対応ができる。)

それに対して新しい材料、刃物を取りあつかう場合には試めしにやってみるという勉強の機会が off J T として必要になることもある。)

(今までの経験では対応できないものについては新らたな教育機会が必要になる。)

<旋盤クリニックの説明>

To この旋盤技能クリニックがフライスにおきかわったら、この向上訓練コースを Na さんは受けたと思いますか。

Na ダメですね。自信がないです。

Wa どこがひっかかる～。

Na 診断があるでしょう。作業工程表を書けとか～。これは普段、紙に書くということではなく、頭の中で考えていることだから～。言葉がでてこない。これを書けといわれてもこまる。

口では言えると思うが工程表に書いてというはちょっと～。

To 現在、文章、文字に表現していない作業工程を書きあらわすことによって、これは Na さんにとって得意なことではないであろうが、それをやることによって違った側面から自分の仕事が見えてこないかという思いがするのです。

Na 定員5名で、この人をくらべるというのでは～。能力があるかないか～。感覚制御能力と～。

Wa そういうのではない。

～

(旋盤クリニックの説明を聞いて、Na 氏が自分にとって必要なものであると感じないのは、このコースの意味づけについての説明に説得力の欠けている点もある。)

(フライス盤を中心にキャリア形成してきた機械工にとっては旋盤の機械の基本であると言っ

てみても通用しない。ゆえに、

「フライス盤技能診断クリニック」を早期に開発する必要がある。これに比較的对象者も広く、甲府地域には適する。）

<Na氏には機械のベテランであるという意識が少ない。“ベテランではないのです”と、そうすると“clinic”の意味が通じにくくなる。>

To 20年前に当時の職業訓練所をでられたということはNaさんにとってどうでしたか。

Na よかったと思いますね。自分で今、このような仕事をやっているからそう思います。ほかの人が違った仕事についているのであればいやだったかもしれないし。

To どのような点でよかったですか。

Na 基本を教えてくれるから。

To その基本が20年たっても生きていますか。

Na 身体でおぼえている。(運転をやっていた)ブランクはあったのですが。

例えば、シェイパーをやれと言われれば、どっちにやればどっちに動く、ということがわかる。やはり、身体でおぼえている。

To 機械のカラクリはどういうものか、その基本が身についている。

Wa 6年間、運転手をしていて機械の仕事に復帰したけれども。

Na 苦にはならないですね。

Wa それは基本がちゃんとやってあるからと。

To 訓練を受けなくて中年になって機械加工の世界に入ってくる人も職場にはいるでしょう。その人達をみてかなり違うような気がしますか。

Na まあ、違うでしょうね。

見ていて(その人達は)ドリルを使っても太い太いなりに回転数をさげておくとか、そのようなことを知っているかどうか。知らないが同じ回転でガサガサやっているような感じである。基本が。

To なるほど。

Na ハイスを使うときも超硬バイトを使っている感じで回転をあげてやっているのを見たこともある。

To 基本の意味あいが理屈でわかっているというよりも(機械加工をする上で)おさえるべき事柄は自然にわかっている。これが基本を学んでいることの強さといえる。

機械加工をするとき、こういう時はこうするのだというポイントを基本として身体でおぼえているのですね。

中途採用者というか、その人達の問題点をさらにあげると。

Na 工具を大切にしない。刃物を続から続へと新しいものに換えていく。再研磨をしない。

(訓練校で機械の基本を学んでこなかった人に、中途からある業界に入ってきてOJTのみで職務をこなしている人々に対して、OJTの後での基本的な知識、技能の向上訓練、OJTに入る前技能としての基本的な向上訓練が必要とされる。)

(途中で、特に30代、40代になって新しい職務について人々の向上訓練のあり方は、訓練方法としても何らかの工夫が必要と思われる。)

(基本といっても技能、動作上の側面と機械加工での作業態度(工具を大切にする)の側面とがある。) (訓練を受けた人々はこれらの基本が身につけているから、本人はあまり意識しなくても理にかなった作業ができています。) (だから、訓練を受けた人は途中でこの業界に入ってきた人の作業上の問題点がみえる、わかるわけである。)

To このようなことからみて訓練校をでてよかったとおられる。

今、38歳ですね。これから20年以上職業生活が続くわけですが、ご自分の夢というか、将来どのようなふうにしたいですか。

これから10年後の私は～。

Na わからない。ここにいると思うけれどもね。フライスをつかって～

To フライスというものに愛着は～

Na ありますね。

(フライスの作業をやることに自分のぶつけて生きている)

Na 角どりなどについては速さ、正確さでは誰れにも負けられないと思う。外にでて～それだけは自信あるね。

To 誰れにも負けられないということを1つ持つことは極めて大切なことだと思います。

誰れにも負けられない技能、自分の持味を中心にしてその周辺へ力を拡大していく、能力を高めていけるとよいのですね。

(自己投企のできる事柄を自分でわかる、自覚する。その上で、誰れにも負けられない技能を大切にしつつ、自分の力を高める。)